



三味線

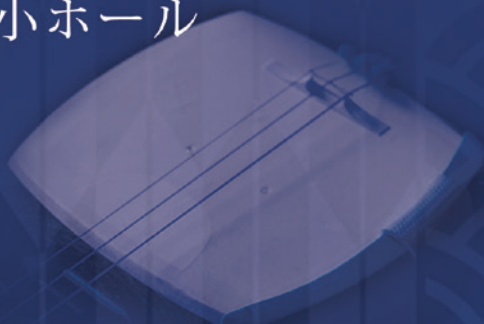


しゃみせんラボ2021

250年の 歴史探訪

2021. 12/15(水) 18:00開演 17:15開場

紀尾井小ホール



三味線LAB

検索

YouTubeにてライブ配信

【特設Webサイト】syami.com/kioi1215



スマホから簡単アクセス

一、長唄 問答入り勸進帳 1840年3月初演、四世杵屋六三郎作曲、三世並木五瓶作詞

【唄】東音西垣和彦 東音山口太郎 杵屋利次郎 東音小島英裕

【三味線】簗田司郎 穂積大志 都築明斗（上調子）長井麻江

歌舞伎を代表する演目「勸進帳」の伴奏音楽で、劇中の音楽を繋げて一曲の音楽としています。このため、途中のセリフやト書きが無いと、芝居の筋を追うことはできませんが、劇的な展開と音楽性の高さから人気曲となっています。

今回は、劇中の名場面である「山伏問答」に焦点を当てて演奏します。

安宅の関の役人「富樫」は、山伏に身を扮した「弁慶」に、山伏の修験道について矢継ぎ早に難問を浴びせます。これに対し、弁慶はその難問に次々と即答し、その疑いを見事に晴らすのです。

二、三絃三重奏曲 浮拍子 1968年、杵屋正邦作曲

【三味線1】都築かとり

【三味線2】長井麻江

【三味線3】都築明斗

浮拍子とは、拍のタイミングの取り方を表す音楽用語で、洋楽ではシャッフルやスイングなどと呼ばれる、浮いたリズムになります。日本の音楽には、この浮拍子が様々な形で使われており、身近なところでは、童謡の「うさぎとかめ」や、「ずいずいずっころばし」など、別名「ピョンコ節」と呼ばれるリズム、また「阿波踊り」もこのリズムが終始使われています。

浮拍子に対する語として、間拍子（まびょうし）・常間（じょうま）、また、逆に拍を詰めることをコケ間と呼びます。この作品では、緩急様々な形で浮拍子が使われており、時に間拍子やコケ間を挟みながら、曲が展開されていきます。浮拍子の持つ軽快さや浮揚感、リラックス感など、いろいろな効果をお感じいただけることでしょう。

三、長唄 狂獅子 1760年頃、鳥羽屋三右衛門作曲

【唄】東音山口太郎 杵屋利次郎

【三味線】守 啓伊子 簗田弘大

長唄の中では「鷺娘」「娘道成寺」と同様に、かなり早い時期に成立した作品で、芝居や舞踊から離れ、純粋な演奏曲として作曲されています。

題名に獅子と付くように、「連獅子」などと同様、石橋（しゃっきょう）の舞台に獅子が登場しますが、その詞章は能「石橋」からの引用ではなく、男性の訪れを待つ女性の心情を思わせる内容になっています。また、三味線の非常に技巧的な旋律は独特で、短い曲中に5回の調子替えがある他、途中に「二上りから三の糸を一音半下げた」変調子が使われています。この時代にあって、これだけ技巧的な作曲がなされたものとは考えにくく、後の時代に様々な奏者によって、何らかの補曲がなされたものと推測されています。

四、さらし幻想曲 1943年、中能島欣一作曲

【箏】上原真佐輝

【三味線】穂積大志

【フルート】齋藤寛

「さらし」という曲は、元来は宇治川の槇の島における、布ざらしの情景を描いた歌詞を持つ地歌で、布を川の水にさらして漂白するリズムカルな仕事の有様や、流れる水の音を描写する旋律は、時代と共に複雑

化し「新ざらし」などと称して高度に器樂的発達を遂げてきました。

この古い地歌「さらし」の中から、いくつかの特徴的な旋律を取り出し、自由に変化発展させて縦横に組み合わせ、フルートの持続音を加えて作り上げたのがこの「さらし幻想曲」という作品です。

第1章と第3章は、急速調で、各楽器に「さらしの手(旋律)」がいろいろと現れ、速い旋律が緊張感をもって複雑に絡み合います。第2章は、フルートの抒情的な旋律を表面に出した緩徐調となっています。初演以来、長唄の三味線奏者が作曲者自身の箏と合奏した例が多く、山田抄太郎氏が三味線をよく受け持ちました。

五、東京音頭、津軽じょんから節

【津軽三味線】川嶋志乃舞 駒田早代

東京音頭は、作詞：西条八十、作曲：中山晋平。レコード化され爆発的な人気を得ました。ヤクルトスワローズの応援歌としても有名で、前奏は民謡「鹿児島おはら節」からの引用です。

津軽じょんから節は、青森県津軽地方の民謡。同地方の遊芸人たちが、門付(かどづけ)を中心に歌ってきたもので、門付には万人に分かりやすい芸が求められたため、太棹で丈夫な犬皮、一の糸を太く、撥は厚手で激しく叩く技法が発達、今日の津軽三味線が確立されたと言われています。

2名の奏者はともに、津軽三味線全国大会にて優勝経験を持ち、各種メディアでの活躍も目覚ましい、気鋭の若手奏者です。

六、二棹の三味線のための「序破急」 2000年、佐藤敏直作曲

【細棹三味線】簗田弘大 【太棹三味線】山崎千鶴子

2000年5月委嘱初演、初演時細棹：簗田司郎、太棹：山崎千鶴子

冒頭ファ#・ソ・ラ#・ド#・ミ・シの音列で始まりますが、全体はこの関係が基本となって、多様に展開されます。文字通り「序」はテーマの提示で導入部分、「破」は一つの展開、「急」は、さらなる速さや「ま」の異なった場面への発展と、三つの部分からなっていて、切れ目無く演奏されます。三味線のために親切的な音楽になったとはとても思えませんが、太棹と細棹との対比が明確に出て音楽の綾が一層深まることを祈っています。(作曲者解説)

佐藤敏直(1936-2002)氏の最晩年の作品で、同氏の代表作としては、邦楽合奏「ディヴェルティメント」や、尺八独奏「片足鳥居の映像」など。

七、三味線協奏曲 ピアノ編曲版 1967年、長沢勝俊作曲／1977年、内田とも子編曲

【三味線】簗田司郎 【フルート】齋藤寛 【ピアノ】高木美来

原曲となる三味線協奏曲は、長澤勝俊(1923-2008)氏による作品で、昭和42年11月に、日本音楽集団第6回定期演奏会にて初演されました。独奏三味線と日本楽器群による協奏曲で、3つの楽章により構成されています。第1楽章は細棹三味線により華やかに、第2楽章は沖縄の三線風に、そして第3楽章は津軽の民謡三味線風に作曲されています。

今回の演奏は、昭和52年12月に、内田とも子氏が伴奏部をピアノ用に編曲したものです。

ご挨拶

本日は、御来場頂きありがとうございます。

私の門下生や指導した学生もプロとなり、いよいよ活躍し始めました。青年時代の熱い志を生涯持ち続け、それぞれが演奏の要となる人材に成長するように願って、この演奏会を継続していければと思っています。皆様の末長い御後援をよろしくお願い致します。

音楽監督：簗田司郎

出演



賛助出演

唄：東音西垣和彦 東音山口太郎 杵屋利次郎 東音小島英裕
箏：上原真佐輝 フルート：齋藤寛 ピアノ：高木美来

スタッフ

YouTubeライブ配信：沖政一志(ファミ箏代表) 遠藤卓也(Harelu Arts)
ステージマネージャー：金子宜弘(かねこ琴三絃楽器店)

主催・制作：一般社団法人和楽器研究会
文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業